



【書評】『比較神話から読み解く 因幡の白兔神話の謎』 今井出版刊

A5判二二五ページ 定価一、七二五円(十税)

酒井 董美

たまたま

よく知られた古事記神話「大国主命と因幡の白兔」にかかわる論文集が上梓された。編者は門田美智子教授(鳥取大学地域学部)である。

本書には編者の「因幡白兔神話の構造」のほか八名の研究者がそれぞれ論考を寄せており、他に別な三名がコラムを担当している。論文の筆者の中にはグルノーブル第三大学のフィリップ・ヴァルテル教授による『古事記』の稲羽のウサギ―医療の起源神話―も含まれているが、他の寄稿者は全てわが国の研究者である。

比較神話から始まるタイトルからも分かるように、論考の大半はギリシャ神話や韓国の説話をはじめとする海外神話や民話と、オオクニヌシと白兔の古事記神話との比較がほとんどである。中にはわが国の民俗行事「ナマハゲ」と白兔を関連付けた吉田敦彦(学習院大学名誉教授)の「因幡の兔と大国主」などもあり、各界の専門家の執筆になるものである。ある意味では種々雑多な内容で統一性に欠けきらないが、それがまた一つの魅力とでも言えるようである。

筆者が特に注目したのは小島瓊禮名誉教授(琉球大学)の「オホクニヌシと因幡の白兔」である。白兔神話のインドネシア昔話「猿と鰐の橋」との関連やアメリカ大陸、アジア全域の伝承文学に目配りしながら、鳥取県内の白兔説話伝承を眺める手法で、多数の関連古書を取り上げている。

地元の『塵袋』『因幡民談記』『因幡志』『勝負名跡志』などのほか、『隠岐島前民話集』(島根大学民話研究会)も見られ、まるで現地の研究者のような土地勘のある記述に、改めて敬意を表したい。

また、同氏によって巻末に『古事記』解題と本文・現代語訳があり、『塵袋』所引「因幡ノ記」の原文が掲載されているのも、読者の便宜を考へてのものようだが、このような配慮についてもありがたく思うものである。